

論文 地方分権化時代のインドネシアにおける地域 セキュリティ組織の展開 -- バリ島サヌールのティ ムススを事例として

著者	菱山 宏輔
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	49
号	8
ページ	2-27
発行年	2008-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007234

地方分権化時代のインドネシアにおける地域セキュリティ組織の展開

——バリ島サヌールのティムスを事例として——

ひし やま こう すけ
菱 山 宏 輔

《要 約》

本稿は、地方分権化の進むインドネシア、バリ島にて展開される地域セキュリティ組織について整理・分析するものである。その際、まず、スハルト体制最末期の中央集権的組織として、サヌール地域安全調整機構（BK3S）をとりあげる。次に、地域社会からの組織化として、伝統的警備隊（プチャラン）に言及し、その後、サヌール安全パトロール特別チーム（ティムス）について詳細に検討する。BK3Sは、スハルト体制最末期における観光業者の試みとして始まったが、当時の社会的混乱をうけ、軍や警察の介入によりその性格を大きく変えることとなった。民主化以降、活況を呈しているプチャランは、地方分権化の担い手と評される一方で、右傾化・急進化の傾向をもつ。ティムスは住民の参加を確保しつつ諸組織の調整役となり、地域に資する活動を可能としている。以上の事例を追うことで、中央集権体制下の各種機構、軍や警察を扱う、地域治安維持体制についてのこれまでの研究に対して、地域セキュリティという新たな観点から、ポスト開発体制下の地域の動向を示すこともできよう。

はじめに

- I バリ島の地域構成
- II 対象地域の概況
- III スハルト体制最末期の地域治安維持の状況
- IV 伝統的警備隊の躍進
- V 地域住民によるセキュリティ組織「ティムス」の展開
おわりに

はじめに

近年、バリ島は二度の爆弾テロに見舞われ、国家による安全保障が大きな問題となる一方で、地域のセキュリティをいかに確保していくのにも注目が集まっている。そうした議論は、2001

年9月11日の米国同時多発テロ以後の、右傾化や保守化といった世界情勢との関わりをもつ。同時に、インドネシア国内では、スハルト体制崩壊に続く地方分権化の推進のなかで、地域社会が、グローバル化による世界規模の影響へとより直接に晒されはじめていることとも関連している。そこから見出される諸問題としては、地方財源の奪い合い、不均衡な開発推進、その影響と共に都市的生活様式の進展による地域環境の悪化や混乱、グローバル・ツーリズムによる資本主義経済の席捲と、観光業就労のための国内移民や、それら移民のインフォーマルセクターへの流入などがあげられる。こうした問題をうけ、バリ島においても、地方政府だけな

く地域住民がローカルな場面でいかに対応し、社会環境を維持していくのが懸案となっている。

このようなバリ社会の動揺に対し、現在、島内では地元のテレビ番組や新聞を中心に「Ajeg Bali」（一貫したバリ）という標語によって、バリの「社会—文化的な自己防衛の必要」[Nordholt 2005, xvii]、「アイデンティティ、場所、文化を護る」[Naradha 2004, ii] 必要が叫ばれている。本稿にて扱うプチャラン（Pecalang）という伝統的警備隊の隆盛はその具体的な現れのひとつである。そのような自警団が時としてみせる過剰な治安維持活動は、「Ajeg Bali」の標語のルーズさが移民の排斥などを正当化し、「文化と宗教の排他的なエスニック・プロファイル」[Nordholt 2005, xxiii] を強化することでバリ人を統合しようとする動きとなっていることに呼応している。以上を鑑みると、社会環境の維持と地域セキュリティ^(注1)というトピックは、特殊バリの状況の生起を背景としながらも、地方分権化とグローバル化が交差するところに、インドネシアの諸地域をはじめ各国の地域社会がもちうる諸問題と、地域社会による対応の傾向を端的にあらわす事例であるといえる。

もちろん、今日、インドネシアの地域セキュリティ組織についての言及は、地方分権化や民主化についての研究のなかで幾ばくかみられるようになってきている。例えば、これまでの中央集権体制下の警察や軍を中心とした議論にかわり、地域社会におけるインフォーマルな暴力の役割が取りざたされている[Baker 1999; 水野 2006; 岡本 2006]。また、バリ島に関する研究についてみても、これまで観光と文化、アイデンティティといったトピックが中心であったなかで、

近年、わずかながらも地域セキュリティ組織に言及する議論がみうけられる[Vickers 2003; Darling 2003]。加えて、ツーリズムに関しても、各国にて、環境破壊・犯罪・テロリズムなど種々のリスクやセキュリティといった観点から分析されるようになってきている^(注2)。

以上のような先行研究の状況を鑑み、本稿は次の2つの着眼点をもつ。第1に、これまでの国家による集権的な統治・治安機構と、先行研究によって着目されはじめたインフォーマルな暴力との間に、地域住民による比較的フォーマルな地域セキュリティ組織の形成がみられるということである。第2に、それが、バリ島という、これまで芸術や宗教の特殊性という点から捉えられてきた地域において、民主化の風を受け生じていると同時に、所与とされてきた地域社会像と機能分化にも影響を与えていることである。この2点からは、ツーリズムに不可分に結びつく要素としても、地域セキュリティが新たな動向を成しているということが示唆されよう。

これらの点を踏まえ、本稿では、観光セクターの要望からはじまるスハルト体制最末期の集権的治安機構（BK3S）、民主化とともに勢力を増す伝統的警備隊「プチャラン」（Pecalang）、地域社会の草の根からのボランティアな地域セキュリティ組織「ティムスス」（TimSus）といった三者の試みについてみていきたい。これらを事例とし、スハルト体制崩壊の過程とその後の地方分権化、グローバル・ツーリズムに関わる諸問題を背景とした地域セキュリティ組織の形成過程を、先の2つの観点から明らかにすることが本稿の目的となる。

I バリ島の地域構成

事例の描写に移る前に、バリ島の地域の特徴を、「慣習-行政」(adat-dinas)という機能的な区分からみた地域構成と、「村落-部落」(desa-banjar)という上下の構成に着目・整理しながら簡単に説明しておく。

バリ島の地域社会は、そのコスモロジーを体现する「デサ」と呼ばれる村落が中心となって形成されてきた^(注3)。デサには、伝統と慣習を担う「デサ・アダット」(desa adat)と行政を担う「デサ・ディナス」(desa dinas)という、特定の域内において境界と成員を異にしながら重複する、地域構成のまとまりが存在する。そのため、ある部落はAデサ・アダットとAデサ・ディナスに属するが、またある部落はAデサ・アダットに属しながらもBデサ・ディナスに属すということがある。外来者においてはデサ・ディナスにのみ属するということもある。デサ・ディナスとデサ・アダットにはそれぞれ村長、秘書、会計、書記などからなる執行部が置かれているが、主としてデサ・ディナスでは出生・結婚・転居といった際の人口の登録業務を、デサ・アダットでは祭礼や儀礼に関する業務を行う。デサ・ディナスは20世紀初頭、オランダ統治時代に人口把握と徴税のために設置された。インドネシア独立以降も、バリをインドネシアという国民国家の一部とすべく強化され、政府の意図を地域に伝える回路とされてきた。その一方で、バリ社会の実体はデサ・アダットにあるとされる。デサ・アダットは、スハルト体制下においても、観光資源としての効用があるとされる限りにおいて活動の自律が許容された。

そのため、デサ・アダットでは行政機能の排除と儀礼面への役割の集中が進み、制度的区分と機能的な分化が明確なものとなっていた。

地域社会にはデサの下に近隣住民組織の最小単位となる「バンジャール」と呼ばれる部落が存在する。バンジャールは、水利組織(subak)や会衆組織(pemaksan)とともに村落政体(village polity)を構成してきた。それらは統合的な村落共和制を成したのではなく、「スカ」(seka)と呼ばれる多様な機能の個々別々の集団と共に、各々が部分的にのみ秩序を保ちつつ集積したものであった。そのため、アウイグ・アウイグ(Awig-Awig)と呼ばれる慣習法典の保有が端的に示すように、各々のバンジャールはデサから一定程度の自律を可能としていた。多くの場合、デサに比べてバンジャールにおいてはアダットとディナスの範囲が重なっていた。とはいえ、デサと同様、国家の存立のなかに位置づけられてゆくに従い、慣習と行政という機能的区分が奥深く貫かれていった。

以上のような地域の特徴をもつバリ島において、地域住民組織がどのような性格をもつのかについては、慣習と行政、村落と部落といった特徴に着目することで、大まかな性格を析出することが可能であるとされてきた[例えばGeertz 1980=1990; Warren 1993]。表1は、この4つの特徴を組み合わせ、地域構成をしめしたものである。

このように、比較的明確に区分されてきた地域構成において、今日のグローバル化や都市化にともなう問題は、そうした既存の地域の枠組みによっては捉えきれない、あるいは解決しきれないものとなっている[吉原 2006]。すなわち、地域住民組織においてそれらの枠組みを超

表1 デサ（村落）とバンジャール（部落），アダット（慣習）とディナス（行政）の関係⁽¹⁾

	アダット（慣習）	ディナス（行政）
デサ（村落）	デサ・アダット	デサ・ディナス
バンジャール（部落）	バンジャール・アダット	バンジャール・ディナス

（出所）Geertz and Geertz (1975=1989), Geertz (1980=1990), 鏡味 (2000), Warren (1993), 山下 (1999) から筆者作成。

（注）(1) 理念的には四種に分けられるが、本文でも述べているように、実際には、アダットとディナスにおいて必ずしもその範囲や人員が共有されているわけではない。バンジャールのレベルではアダットとディナスの範囲・人員ともにはほぼ重なるが、デサのレベルでは比較的明確な区分がなされている。

え出たり、他の立場から戦略的に捉え直される変動の契機がみられる。本稿で扱う地域セキュリティ組織の取り組みをみるにあたって、そうした研究動向や地域の状況との関連は、主要な着眼点となる。

II 対象地域の概況

次に、本報告の調査対象地域であるサヌール (Sanur) 地域について説明する^(注4)。ここでいう「サヌール地域」とは、バリの州都デンパサール市^(注5)のうち南デンパサール郡 (Kecamatan Denpasar Selatan) の一部を成す地域であるが、単独の行政機構をもつ行政単位というわけではない。デンパサールの中心から南東に6キロメートルほど、3つのデサ・ディナスと3つのデサ・アダットの下に27の部落が地域を構成している。この範囲全体が、本稿にて扱う地域セキュリティ組織の活動の舞台となる場所であり、地域住民からも総称して「サヌール」とよばれる地域である。

2000年の時点で居住者3万1713人、9395世帯を擁し、300万のバリ島人口の1パーセントを占める^(注6)。面積はおよそ10.6平方キロメートル、人口密度は3000人／平方キロメートルとな

り、わが国においては大阪府堺市美原区（面積13.24平方キロメートル、人口密度2951人／平方キロメートル）に近い。転入率は2.4パーセント、転出率は1.7パーセントであり人口移動は少なく、宗教はヒンドゥー教信者が90パーセント以上を占めており、居住者の同質性は高い。もともと、近隣地域から多くの観光業就労者が集まるため、住民として登録されていない昼間人口はより多く、昼夜の人口の流動性も高いと推測される。

表2はサヌールの住民登録者とバリ島全体の就業形態を示している。バリ島全体では、34.7パーセントが農林水産業に従事している一方、サヌールでは11.5パーセントと3分の1である。商業、工業は同程度であるが、運輸・通信、行政・サービス業はバリ島全体のほぼ2倍となっている。

地域内総生産額（表3）に占める割合として、サヌールでは、協同組合を示す「11. その他 (d. 社会的事業)」に続き、「2. 加工産業」と「11. その他 (c. 工業と手工業)」などの工業18.4パーセント、「7. 商業」と「11. その他 (a. ホテル)」など商業・宿泊業13.8パーセントと続く。バリ島全体と比べると、サヌールの全生産額に占める農業 (2.1パーセント) の割合は10分

表2 サヌール (2000)⁽¹⁾⁽²⁾とバリ島全体 (2001) の住民就業状況

サヌール			バリ島全体		
			(単位：人)		
稲作	529	7.0%			
農業	0	0.0%			
漁業	138	1.8%			
畜産	200	2.7%			
農林水産	867	11.5%			
鉱業・採掘	0	0.0%	農林水産	549,955	34.7%
電気	32	0.4%	鉱業・採掘	7,481	0.5%
商業	1,564	20.8%	電気・水道	2,706	0.2%
工業	1,065	14.1%	商業, レストラン・ホテル	374,297	23.6%
運輸・通信	524	7.0%	工業	239,374	15.1%
銀行業・会計	85	1.1%	輸送, 貯蔵・通信	68,329	4.3%
行政 (公務) ・サービス業	1,547	20.5%	財政・金融・不動産	30,920	2.0%
			サービス業・個人事業	185,560	11.7%
その他	978	13.0%	建設	124,546	7.9%
			その他	749	0.0%
計	7,529	100.0%	計	1,583,917	100.0%

(出所) BPSD (2000, 40-41), BPSB (2001, 55)。

(注) (1) Sanur Kauh, Sanur, Sanur Kajaの合計。

(2) サヌールにおける農林水産は、稲作、農業、漁業、畜産の合計。

の1となっている。また、商業・ホテル (13.8パーセント) においても、バリ島全体において総額に占める割合からみると、およそ3分の1である。他方で、工業 (18.4パーセント)、「8. 銀行・金融組織」と「9. 住宅賃貸」と「10. 土地貸し」など金融・不動産 (10.0パーセント) ではバリ島全体と比べ2倍となっている^(注7)。サヌールにおいて工業は土産物品などの手工業品、不動産は外国人向けの貸別荘や土地貸しなどを意味し、それらが地域内生産額の割合の多くを占めていることがわかる。商業については、例えば、ン・グラライ国際空港界隈に大型のショッピングモールが多く存在する隣県、バドゥン県のクタ周辺と比べると、比較的古いタイプの土産物店が立ち並ぶサヌールでは、割合が低くなっていると考えられる。ホテルについては、そのグレードからみると、バリ島全体の5

つ星ホテルは32あるが、そのうち23は隣接するバドゥン県に位置し、サヌールが含まれるデンパサールでは3である [BPSB 2001, 293]。客室数ではバリ島全体で1万7027室あり、バドゥン県では1万2933、デンパサールでは2939となる [BPSB 2001, 294]。このように、ホテルの数・規模においても、隣県がサヌールを含むデンパサールに大きく水をあけることになる。観光地において商業・ホテルは大きな位置を占めると考えることができるが、この点からすれば、サヌールはどちらかといえば豪勢なホテルやショッピングモールを売りにするのではなく、路面店型の土産物店や小・中規模の手頃なホテルが目につく場所であるといえよう。とはいえ、バリの伝統的な農村・農耕イメージからすれば、サヌールはそこから大きく隔たる観光地域であるといえる。

表3 サヌール地域内生産額⁽¹⁾とバリ島全体の地域内総生産(2000)⁽²⁾

サヌールの地域内総生産			バリ島全体の地域内総生産		
(ルピア)			(100万ルピア)		
1. 農業	1,317,200,000	2.1%	農林水産	3,403,269	20.6%
11. その他 (b. 畜産)	43,342,000	0.1%			
小計	1,360,542,000	2.1%		3,403,269	20.6%
2. 加工産業	1,944,800,000	3.0%	工業	1,588,835	9.6%
11. その他 (c. 工業と手工業)	9,900,891,692	15.4%			
小計	11,845,691,692	18.4%		1,588,835	9.6%
3. 鉱業・採掘業	0	0.0%	鉱業・採掘	114,892	0.7%
4. 電気・ガス・水道	931,500,000	1.5%	電気・ガス・水道	206,380	1.3%
5. 建築	456,170,000	0.7%	建設	687,510	4.2%
6. 輸送・電信	4,045,537,885	6.3%	輸送・通信	1,867,935	11.3%
7. 商業	7,177,360,850	11.2%	商業, ホテル・レストラン	5,479,792	33.2%
11. その他 (a. ホテル)	1,736,000,000	2.7%			
小計	8,913,360,850	13.8%		5,479,792	33.2%
8. 銀行・金融組織	1,595,598,615	2.5%	金融・不動産業	981,519	5.9%
9. 住宅賃貸	4,296,700,000	6.7%			
10. 土地貸し	550,000,000	0.9%			
小計	6,442,298,615	10.0%		981,519	5.9%
11. その他			サービス業	2,179,853	13.2%
d. 社会的事業(共同組合)	26,860,122,000	41.7%			
e. その他の事業	3,533,548,000	5.5%			
	64,388,771,042	100.0%		16,509,986	100.0%

(出所) Desa Sanur Kaja (2000), Desa Sanur Kauh (2000), Kelurahan Sanur (2000) から筆者作成。バリ島全体についてはBPSB (2001, 375-376)。

(注) (1) Sanur Kauh, Snur, Sanur Kajaの合計。

(2) サヌールの項目は、バリ島全体の項目にあわせ順序を入れ替え、いくつかの項目をひとつにまとめている。

ここで、サヌール地域の中心地の様子を描写しておこう。サヌールの代名詞ともなる、南北に貫く目抜き通りの「ダナウ・タン布林ガン通り」(Jalan Danau Tamblingan)には、小規模で比較的古いタイプ、すなわちガラス張りというよりはオープンエアの土産物店やレストランが連なる。通りを挟んで内陸側には比較的安価な宿泊施設、海岸に面してはバリ人オーナーのものを含む中・高級ホテルが並び、滞在客はビーチで過ごしたり、通りを歩いてショッピング

を楽しんだりしている。静けさ、落ち着き、昔ながらのバリらしさが残る場所といわれるサヌールではあるが、観光の中心をなす目抜き通りをも含むかたちでそのようにいわれるのは、ごく最近のことである。

1960年代はじめ、日本の戦後賠償の一環で、300の客室数をもつ10階建てのバリ・ビーチ・ホテルが建設された。それを契機に、バリ島初のマス・ツーリズムの要所として政府による開発が進められて以来、サヌールは多くの観光客

を集めてきた。しかし1990年代に入ってからには他の観光地の躍進から、観光客の出足が鈍りはじめた。それとは反対に、種々のインフォーマルセクター就労者がひしめき [Cukier and Wall 1994], 交通渋滞を引き起こし、観光客を巡る争いや喧噪につつまれ、地域をいかに方向付けていくのかが大きな問題となっていた。そうした状況から、古き良きバリらしさを残すといわれる今日のサヌールの環境が形成されるまでには、地域セキュリティを巡るいくつかの動向が大きく影響している。

Ⅲ スハルト体制最末期の 地域治安維持の状況

1. サヌール地域安全調整機構 (BK3S) の 形成と変容

1997年7月にタイにて発生した経済危機は、広くアジア諸国に影響を与え、インドネシアにおいてもっとも深刻な危機を引き起こした。例えば、1997年から98年にかけての世界の国際観光客数の伸び率は、80年以來の拡大基調を保ち2.1パーセントであったのに対し、東アジアは1.2パーセント減であった。インドネシアは最悪の状況をみせ、観光客は12.6パーセント減、日本人では36パーセント減となった [鈴木 2000]。バリ島の観光客数では1997年に123万316人、98年には118万7153人と3.5パーセントの減少にとどまった [BPSB 2001, 290]。すなわち、インドネシア全体からすればその国際的観光地としての輝きは失われていなかったといえよう。そこに、1990年代に入ってから増加していた他島からのインフォーマルセクター就労者に加え、アジア経済危機によって就職難に喘ぐ人々がツー

リズムによる利益を目指して流入した。しかしながら当時、バリ島であっても、それらすべてをフォーマルな職に受け入れる容力はもち合わせなかった。観光客の減少とそれともなう観光産業におけるフォーマルな就労機会の減少により、路上には多くのインフォーマルセクター就労者が出現し、犯罪も増加することとなった。

経済不安と地域社会の混乱を受け、サヌールではいち早く、デンパサール市観光局に対して、地域セキュリティ組織結成の請願がホテルのオーナーを中心になされた。そこで、デンパサール市が音頭をとり1997年12月に結成されたのがサヌール地域安全調整機構 (Badan Koordinasi Keamanan Kawasan Sanur, 略称BK3S) であった。表4は組織構成を示している。監督 (pelindung) にデンパサール市長とバドゥン県警察長、その下の顧問 (penasehat) には南デンパサール郡長と南デンパサール郡警察長がついた。以下、執行部 (panitia pelaksana) にはホテル、観光協会、銀行、サヌール開発財団^(注8)が着任した。代表部 (perwakilan) には6つのグレードに区分されたホテルから、さらにレストラン、銀行、商店、レンタカー店、旅行代理店など様々な事業者を集めた [Walikota Denpasar 1997]。ここに、観光地域の治安の悪化に対して、様々な観光業種の視点から取り組むことができる機構が形成されたかにみえた。しかし、よりマクロな社会的動向をみると、この時期は、年明けからの学生運動や対政府組織の動きが活発になる直前であり、経済危機が政治不安を引き起こしつつあった。そうしたなか、多様性の頂点に地方官僚と警察を冠するBK3Sの組織形成は、政局を維持しようとする中央政府の動向と歩調を合わせ、観光産業が警察 (軍)^(注9)の指導下におかれる

表4 1997年12月10日会議で決定されたBK3S組織構成

執行部	
監督	デンパサール市長
顧問	バドゥン県地区警察長
	南デンパサール郡長
長 I	南デンパサール郡警察長
	ホテルA
長 II	インドネシア観光業協会
副長 I	ホテルB
副長 II	— (業種不明)
秘書 I	サヌール開発財団 (YPS)
秘書 II	ホテルC
会計 I	銀行A
会計 II	銀行B
代表部	
5つ星ホテル	ホテルD
4つ星ホテル	ホテルE
3つ星ホテル	ホテルF
2つ星ホテル	ホテルG
1つ星ホテル	ホテルH
星無しホテル	ホテルI
レストラン	レストランA
銀行, 両替所	銀行C
商店	商店A
レンタカー	レンタカー店A
	レンタカー店B
旅行代理店	旅行代理店

(出所) Walikota Denpasar (1997) より筆者作成。

過程を意味したといえよう。

1998年5月に行われた会議を機に、組織形態は国家権力の下請け的な性格をいっそう明確にした。1998年に入ると、1月のスハルト予算演説以後、散発しはじめる学生や活動家らのデモ、商店の略奪・焼き打ちがみられるようになった。2月には、スハルトによる華人陰謀説をうけた反華人暴動が生じ、学生たちも抗議運動を開始した。3月の国民協議会でのスハルトの大統領7選を機として、学生が掲げるレフォルマシは全国的な民主化運動へと発展し、他方で、国軍は内部分裂を強めていた。5月4日の原油価格

値上げは、続く5日、大規模なメダン暴動を引き起こし、国内情勢は混乱を深めていった。こうした背景をうけ、BK3Sにおいて、「安全と安心の雰囲気の創出のための助成をいっそう呼びかける」必要のために決定がなされた [Dinas Pariwisata 1998a]。組織構成には新たに、郡長 (CAMAT)、郡のレベルにおかれる分軍支部 (KORAMIL) 司令官 (DANRAMIL)^(注10)、郡警察署長 (KAPOLSEK) からなる指導者間の調整協議会である郡指導者会議 (Musyawarah Pimpinan Kecamatan, 略称MUSPIKA) と、各デサ・ディナス長など地元高官 (Pejabat setempat) が加えられなければならないとされた。この決定をうけたBK3Sは組織改編を進めた。

5月21日、スハルトが辞任を発表、翌22日にはハビビを大統領とした内閣が発足したものの、スハルト体制を支えてきたゴルカル、軍、政治腐敗と汚職の構造は依然として根強く残っていた。それはBK3Sの組織構成にも色濃く反映された。5月のBK3S組織改編のための会議の後、1999年1月の時点において、BK3Sは表5にみられるような人員を擁した。監督にはデンパサール市長と県警察長の二者に加え、バドゥン県陸軍地域軍管区司令官 (Komandan Resort Militer, 略称DANREM) が新たに配された。顧問職は9名に増員され、3人のデサ・ディナス長、観光局長、さらに分軍支部司令官 (Komandan Rayon Militer, 略称DANRAMIL) が就くこととなった。執行部の人員数は減らされ、観光関係者としてはひとつのホテルのみがあがっており、他はデサ・ディナスからの代表と観光局からの代表となった。代表部は無くなり、代わって、資金部門 (bidang dana)、組織部門 (bidang organisasi)、装備部門 (bidang perlengkapan)、総務部門 (bidang

表5 1999年1月1日時点でのBK3S組織構成

監督	デンパサール市長 バドゥン県地区警察長 (KAPOLRES) バドゥン県陸軍地区軍管区司令官 (DANREM)
顧問	観光局長 南デンパサール郡長 (CAMAT) 分軍支部司令官 (DANRAMIL) 郡警察署長 (KAPOLSEK) サヌールのデサ長/クルラハン長 ホテルA — (名前のみ記載)
長	サヌール・カジャ (村落)
副長	ホテルB
秘書	— (記載無し)
副費署	観光局
会計	クルラハン・サヌール (町)
副会計	デンパサール第二級自治体市観光局
資金部門	ホテルB ホテルC 旅行代理店A
組織部門	郡警察警備部長 (KANIT SABARA) クルラハン・サヌール (町) サヌール・カウ (村落)
装備部門	クルラハン・サヌール (町)
総務部門	サヌール・カジャ (村落) ホテルD

(出所) Walikota Denpasar (1999) より筆者作成。

umum) が設置された。そこでは、観光業関係者としては3つのホテルとひとつの旅行代理店の名前があるのみであり、残る部門はデサ・ディナスからの代表と郡警察警備部長 (KANIT SABARA) によって構成された [Walikota Denpasar 1999]。ここに、県と郡それぞれに軍・警察、その下に地方官僚と各部門を設置することによって、スハルト辞任から半年後に至ってなお中央集権体制の末端の様相を強固なものとした。

こうした組織の変化と同時に、BK3Sにおける地域セキュリティの実動部隊の規定にも変化がみられた [Dinas Pariwisata 1998b]。当初から、隊員規定には警察での3週間の研修、インドネシア国軍の訓練や研修内容の踏襲、警察医師か

らの健康の証明というように、警察や軍に依る規定がみられた。さらに、1997年の時点で各デサ・ディナスから15人を集めた45人構成だった実動隊の成員に、98年には新たに8人の観光警察が「助力者」として加えられ、「謝金」として給与が支払われるようになった。郡警察署が実動部隊成員の暫定的な事務所指定されたこともあわせて、実動部隊においても警察や軍の下に活動が行われていた。当の活動はパトロールをおもな任務としたが、その時間 (朝8時から夜8時) も場所 (目抜き通りのみの「線」的区域) も手段 (バイクによる) も限られていた。対象は路上駐車係や行商といったインフォーマルセクターと、スリなどの犯罪とされたが、前

者については観光客の邪魔をしているかどうかという行為が注視され、その存在や商業形態が問題とされることはなく、面としての地域全体の状況を踏まえて活動を組織するまでには至らなかった。

2. BK3Sの衰退

以上のように、BK3Sは、アジア経済危機に直面した観光業主たちによる地域治安強化の要望にはじまったとはいえ、民主化へと舵が切られてゆく社会情勢のなかであっても中央集権体制の末端であり続けた。その過程において、当初の多様な観光事業者は組織から排除され、警察と軍が配置されていった。実動部隊に関しても同様の管理体制をみせた。そうした役員・成員の一貫した集権的組織構成の一方で、地域社会の諸問題に対応する実働は限定的であり、観光業者が望むような、地域に資する組織ではなかった。

地域社会においては、統制されないインフォーマルセクター就労者がなおいしめき、観光客を巡る争いが目立った。スリや悪徳な土産物店への対処も進まなかった。路上駐車によって道は塞がれ、ゴミも散乱していた。こうした状況に対応するためには、地域社会の要望に即した、より民主的な組織と、それを支える機構や制度が必要であった。1999年に入ると、5月には村落の多様性を規定する地方行政法が制定され、6月の総選挙では闘争民主党が第一党となり、10月の国民協議会によってワヒド政権が誕生するというように、民主化への改革が勢いを増した。こうした変化のなか、BK3Sは急激に失速する。

1999年12月、デンパサール市長の助力のもと、近隣住民によるサヌール開発を目的としたサヌ

ール開発財団 (Yayasan Pembangunan Sanur, 略称YPS) とBK3Sとが協議を行った [YPS 1999]。その結果2000年1月から、YPSは、その長がBK3Sの長を兼任するとともに、毎月助成金を支出し、ホテル、各種観光事業、デンパサール市からの助成金のとりまとめ役を担うこととなった。また、YPSにおいて5年ごとに行われる、役員選挙ならびに事業報告会である業務協議会 (Musyawara Kerja) のなかに、BK3Sについての規定を盛り込むこととなった。そこでは、「BK3Sは、YPS、サヌール地域の経営者達、デンパサール市、観光警察の協力のひとつのかたちであり、理事はサヌール出身男性から成る。成員もまたサヌール出身者ならびにその周辺の青年達である」 [YPS 2000a] とされ、BK3Sだけを特別視するのではなく、種々の団体の協力と、成員はサヌール地域に関係するという点が強調された。それというのも、YPSは、サヌール地域全体のセキュリティをBK3S単独で担うことは不可能であると認識していたからである。同様に、地域とのつながりという点では、YPSのメンバーシップと活動の基盤に、これまで開発の単位とされてきたデサ・ディナスではなく、バンジャール・アダットが据えられた。バンジャール・アダットは、ギアツやウォレン [Geertz 1980; Warren 1993] が評価したように、多元的共同性の構成要素であり、バリ島における市民社会的な活動の基礎とも成り得る。その可能性が具体性をもって現れてくることは、民主化のひとつの契機でもある。YPSは、BK3Sを引き継ぎつつも、そうした新たな社会状況のうえに、住民のより詳細な意志を反映し、多様な参加者による「ひとつのサヌール」を可能とするような組織と環境づくりに舵を取ろうとしてい

た。

YPSへと監督権が移譲されたBK3Sは、2000年11月の時点で、実動部隊の成員を45人から33人へと減少させていた。給与も35万ルピアから25万2500ルピアとなった。デンパサール市による文書のなかにも、BK3Sは「サヌール観光地域の安全と平穏の問題に取り組むフォーマル／インフォーマルな、団体、組織、関連機関との調整を行う」として、BK3Sを単独で強化するのではなく、地域の他の組織との協働が謳われるようになった [Walikota Denpasar 2000a]。このようにしてBK3Sは縮小し、2005年10月の時点で実動隊員を9名にまで減少させ、役員も実質的には、YPSの長が監督として就くのみとなった。

代わって、地域のセキュリティにおいては、地域社会の側から新たな動きが現れている。ひとつは、バリ島の慣習 (adat) の面から、「宗教」や「伝統」、「一貫したバリ」 (Ajeg Bali) といった言葉をともなって生起し、バリ島全土にて注目を集めているプチャラン (pecalang) という名の伝統的警備隊である。もうひとつは、同じようにadatを重視しつつも、より多様な人員を集め、地域の諸問題に対応するための試みとしてサヌールの地域セキュリティの最前面にたつ、サヌール安全パトロール特別チーム (Tim Khusus Patroli Keamanan Sanur, 略称TimSus PKS) すなわち「ティムスス」である。

IV 伝統的警備隊の躍進

地域治安の問題の先鋭化は、中央集権体制崩壊を機にしていた。アジア経済危機の影響によってスハルト体制が崩壊すると、中央集権によ

る地域治安を担ってきた地域治安システム (Sistem Keamanan Lingkungan, 略称SISKAM-LING)^(注11)もまた弱体化した。前節で述べたように、サヌールにおいて暫くの間はBK3Sが影響力をもっていた。しかし、多くの観光地のホテルや店舗は私的にガードマンを雇った。もともと、その費用を捻出することができない場合、数店ごとに1人のガードマンを雇うという状況であった。職を失った人々のなかには、プレマン (preman) とよばれる「ごろつき」となり、ガードマンを襲撃し、自分たちを雇うようにと圧力をかけたり、みかじめ料を取る者達もいた。観光地域には行商や手押し屋台、新聞売り、物貰いといった様々なインフォーマルセクターがひしめき、観光客への執拗な押し売りや、顧客をめぐる争い、ゴミの増加や交通渋滞もみられるようになった。同時に、悪質な商売の店舗、スリや強盗もみられ、地域社会は早急の対応を迫られていた。

そうしたなか、地元紙*Bali Post*の2000年6月16日付けの記事では、バリ島中西部に位置するタバナン県にて、自発的なセキュリティ・システム (system pengamanan swakarsa) として、特別なプチャラン (pecalang khusus) が設置され、地域セキュリティの中心的役割を果たすとともに、警察や軍との協力も視野にいれられている様子が報告されている。同様に、2001年4月18日付けの記事では、バリ・ヒンドゥーの総本山であるプサキ寺院にて、参道の観光客を目標に大挙して押し寄せる行商にたいし、聖なる地域を維持するためにプチャランが組織される旨が報告されている。さらに、同紙2005年6月13日付けの記事では、地方選挙時の安全確保に動員される様子、2005年6月27日付けの記事では、

不法漁業や自然破壊行為に対する海防への頼りだす様子を見て取ることができる。2000年以降、このように、バリの伝統的な装束として白黒の市松模様の腰布 (sapat poleng) をまとい、短剣 (keris) を腰にさしたプチャラン (pecalang) と呼ばれる警備隊が自警団の役割を担いはじめた。同時に、各地でプチャランによるインフォーマルセクター排除の動きがみられるようになった [Vickers 2003; Soethama 2004; Suryawan 2005]。

プチャランとは、一般に、宗教的祭礼時のみ交通の整理や人の誘導を行う、バリの伝統的装束をまとったガードマンのことを指し、その名はバリ語で「凝視し見守る者、監督する者」を意味する。成員は各バンジャール・アダットから選出され、活動はデサ・アダット単位で行われている。Widnyani and Widia (2002) によると、歴史的にこの組織は、ヒンドゥー教伝来と同時に社会生活の助力のために各地で整備された住民組織を指すが、19世紀末までの諸王国時代には寺院の警護、植民地政府下では商人達の警護、スハルト体制下においては祭礼時の交通警備に役割が限定され、規模や人員も縮小されるというように、一貫した役割や組織形態があったわけではない。近年になりプチャランが注目を集めるようになったのは、メガワティ前大統領の所属政党である民主党メガワティ派、後の闘争民主党 (Partai Demokrasi Indonesia-Perjuangan: PDI-P) によって、1998年10月にサヌールにおいて開かれた党大会からである。

この時プチャランは、党のガードマンの役割を担うよう都市部を中心に招集され、バリの民族衣装をまとい寺院の儀式に出席するメガワティとともに、その勇壮な警備姿がマスメディア

によって報道された [Widnyani and Widia 2002]。インドネシアの全国紙KOMPASの2000年11月28日付けの記事によれば、期間中、2000人の警察、1400人の軍人による警備とは別に、党付きの警備として1200人のプチャランが動員されていた。同記事によれば、スハルト退陣から5カ月経過してなお、ハビビ大統領は民主党メガワティ派の動きを警戒しており、メガワティ派にとっては、党の側にたつ警備員の準備は難しい状態にあった。そのため、同党にとってバリ島にて党大会を開催する利点は、「インドネシアにおいて一番の外貨収入源である観光地バリでは、国軍が暴力で党大会を妨害することは不可能」[秋尾 2000, 266] であることであった。それに加え、メガワティの祖母がバリ島北部シンガラジャ出身であり、プチャランの名前は身近なものであったこと、そうした親バリのイメージのうえに警備員を確保できることもまた、大きな利点であった。この党大会以来、各地でプチャランが組織されるようになり、影響力を強め、2001年のバリ州政令には、デサ・アダットにおける地域セキュリティの一端を担うとの規定が盛り込まれるまでに至った [Propinsi Bali 2001]。さらに、バリ・ポスト・グループのリーダーであるSatria Naradhaによる2002年からのAjeg Baliキャンペーンが後押しし、バリの社会を護る尖兵としての役割が確固としたものとなった [Naradha 2004; Suryawan 2005]。

しかし、そうしたプチャランの躍進に関してはバリ島内でも賛否がある。賛成する意見としては、プチャランこそ地方分権化と民主化を担うものであり、これまで政府によって強められてきたデサ・ディナスに対して、バリの精神を体現するデサ・アダットが自立できる契機であ

るとする [Widnyani and Widia 2002 ; Naradha 2004]。Widnyani and Widia (2002) は、その延長に、デサ・アダットがデサ・ディナスの機能を担うことさえ可能であると予測する。また、2005年1月21日付けの*Bali Post*では、これまで行政の側面において組織されてきた民間防衛組織 (Pertahanan Sipil, 略称HANSIP)^(注12)は、慣習の側面を担うプチャランにとって代わられるべきであるとの意見が出されている。その一方で、同記事では、行政と慣習の明確な機能区分がなくなることで、プチャランが政府の活動の一部となってしまうのであれば、アダットの活動が制限されてしまったり、逆に、政府の活動自体が伝統的・宗教的に神聖化されてしまうのではないかという点も指摘されている。

また、より端的にプチャランの躍進に反対する意見として、Suryawan (2005) は、地域によってプチャランの暴走ともとれる事態がみられることにたいして警鐘をならしている^(注13)。例えば、プチャランは、法的には禁止されているにもかかわらず、地域住民、特に外来者やインフォーマルセクター就労者の住民票チェック、立ち退きの強制、住居の取り壊しや屋台の襲撃に携わることさえあるという。Suryawan (2005) のようにプチャランに対して懐疑的な意見は、そうしたプチャランの活動と、それを求めさえる地域の状況に、民族主義あるいはファシズムの徴候をみいだすものである。また、同様にSuryawan (2005) によれば、プチャランどうしの連携は無く、お互いの活動内容や警備の理念についての共通認識、情報共有があるわけではない。すなわち、それらはあくまで点としての活動であり、その限りで面としての地域に計画的に寄与することは難しいとされる [Suryawan

2005]。こうした批判からすれば、プチャランの互いに隔絶した散発的な活動は、従来、行政面での仕事とされてきた住民票チェックの活動等を通して政府との関係を結ぶことで、政府の意向によって方向付けられ、制御される可能性をもつといえよう。加えて、これまでバリ島の伝統は、バリというひとつの州が国家のなかになかに位置づけられていくのかという点から創造・調整されてきた側面をもつこと [例えば鏡味 2000]、同様に、「Ajeg Bali」もまた国家との関係を基軸にした上からの呼びかけという性格をもつことを考慮すれば、プチャランは地域における伝統を基礎とした凝集の様態でありながらも、依然として政府によるコントロールの余地を残すといえる。現在のバリ島での地域セキュリティ組織について論じる場合、こうした、プチャランを巡る動向との関連も重要なものとなる。

V 地域住民によるセキュリティ 「ティムスス」の展開

1. 基盤としての近隣住民組織

民主化、地方分権化の流れにおいて、地域社会からは、伝統や宗教とは比較的距離をとりながら地域固有の問題を取り上げ解決することで、自らの地域に資するセキュリティを組織しようとする試みも現れている。それが、次にあげる「ティムスス」(TimSus)、サヌール安全パトロール特別チーム (Tim Khusus Patroli Keamanan Sanur, 略称TimSus PKS) である。まず、特別チームの基盤となったサヌール開発財団 (Yayasan Pembangunan Sanur, 略称YPS) とはどのような組織であるかについて確認しておく^(注14)。1960

年代からサヌールにて始まったリゾート開発を受け、サヌール地域は、政府や観光客によって搾取され、疲弊してしまうのではないかという不安に直面した。そこで、1966年、ブラフマナ（僧侶階級）であり地域の信頼の厚かったプラタ（*Ida Bagus Brata*）の主唱により、サヌール住民の将来の生活を守るという目的の下、YPSの前身であるデサ育成助成資金財団（*Yayasan Dana Bntuan Pembina Desa*）が設立された。この財団によって、銀行設立と地域開発資金の貯蓄、ボランティアな運用による中学校の設立、事業体の組織化と産業の育成等が行われ、地域は順調な発展をみせた。

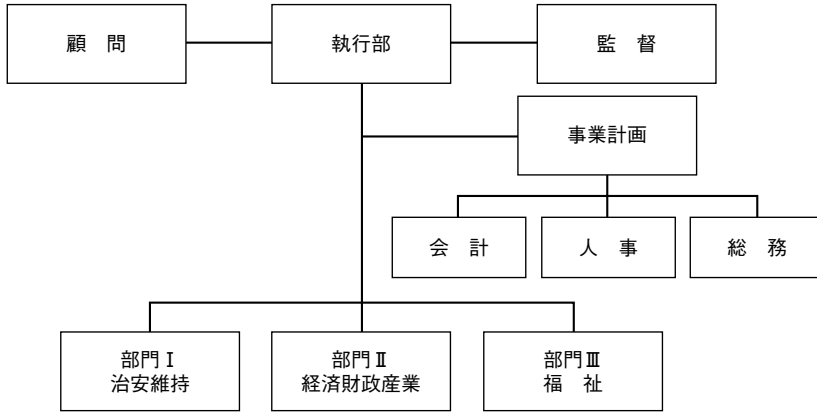
しかし、プラタが他界する1986年前後、インドネシアは、原油価格下落による不況に見舞われた。インドネシア・ルピアは大幅に切り下げられ、インフレのなか賃金-利潤関係の圧迫を招いた。サヌールでは、バリ島外部からの投資によって競争は加速したが、デサ事業の利益は減り、熟練労働者は外部へと流出した。村落は、そうした職員を引き止めようと、インフレにあわせて大幅に増加していた国家公務員賃金なみの手当を出すこととなった。そこに、1984年からの税務規則改定によって、政府からの開発助成金を数倍上回る納税額が課せられた。それら出費を埋め合わせるために、デサ銀行は無利子のローンを組むなど村落の財政を補填し、村落内での影響力を強めた。

こうしたなか、サヌール全体が世間並みの生活水準に至るというデサ開発の理念は揺らぎ、賃金格差が増大した。村落、銀行、事業体は、相互の分離と緊張をみせた。銀行は、独自に賃金水準を確保したいと提案し、経済的合理性の立場から、地域内での報酬の格差を支持した。

すなわち、銀行役員は、これまでの平等路線ではなく、諸事業の高度な独立とそのことによる効果的な競争が、開発を促進させるだろうと考えた。他方で、事業体の労働者や成員のなかには、モラルの減退と、発展の共同目的の消失を指摘する声もあり、経済-社会的なコンフリクトが生じはじめた。そうしたなか、サヌールに存在する3つの村落のうちひとつが、評議会や財政権をもたず政府からの開発プロジェクトに従う義務をもつ行政単位であるクルラハン（町）となり、地域社会の意志決定から隔たってしまう可能性がはじめた。YPSにおいて地域セキュリティが問題とされるようになるのは、以上のような背景、すなわち、経済不況と、政府による干渉が地域内に変容をきたそうとするなかであった。

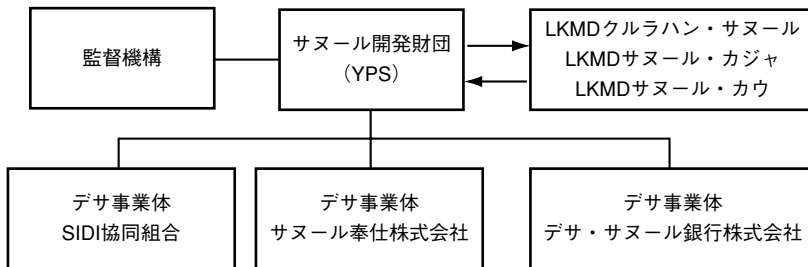
地域住民に資する目的で設立されたはずの財団は、1988年の第2回業務協議会における規定において、デサ・ディナスの活動の支援、HANSIPの支援、あるいは中央集権体制を補完する村落開発の範囲でのセキュリティの支援という役割とされた [YPS 1988]。図1はこの時点でのYPS組織構成を示している。部門はわずか3つであり、非常に単純な構成となっている。ここでは、YPSはデサ・ディナス政府の下請けともいえる活動を担うようになっていた。すなわち、「YPSは、最初に基金の蓄積の役割であったが、デサ開発の時代に適うLKMDが政府によって制定されて以来、サヌールの3つのデサ(行政村)の連合・開発組織として発展」[YPS 2000b, 49] することとなった。図2は、YPSの構成がLKMDとの関係からも規定されるようになったことを示している。このようにYPSは開発のための末端組織に組み入れられる一方で、内部で

図1 第2回業務協議会におけるYPS組織構成



(出所) YPS (1988) より筆者作成。

図2 第2回業務協議会におけるYPSと村落(デサ)との関係⁽¹⁾



(出所) YPS (1988) より筆者作成。

(注) (1) SIDI協同組合の「SIDI」とは、バリ語の丁寧語の略であり、「Suksmaning Idep Darana Ika」[こころの底から感謝すること、それが私たちの手段である]という文章となる。

は、プラタの他界後から1988年までの2年間、リーダーシップの空白と混乱が生じていた。さらに、業務協議会の開催や他の事業体との関係をマネジメントするための綱領ならびに規約 (Anggaran Dasar dan Anggaran Rumah Tangga, 略称AD&ART) がないということが課題となっていた [YPS 2000b, 51]。

そうした役割から脱し、地域に資する自治的な活動に踏み出すのは、1992年の組織改編から

である [YPS 2000a]。この時、いまだ体系だったAD&ARTがなく、大規模な業務協議会を開くことはできなかったものの、証書の記載を変更し決定のすべてをYPSに帰属させるとともに、「バンジャール・アダットをYPSの会員とする」ことが決定された。すなわち、各バンジャール・アダット長に「宗教生活、デサ・アダットの文化の側面だけでなく、YPSと事業体の事業の監督 (pengawas)」という「二重の役割」(ber-

fungsi ganda) をもたせた。そのことによってバンジャール・アダット長は、YPSの構成員という基盤のうえに一定の権限をもつことができるようになった。しかし、このことは同時に、YPSが、末端のバンジャール・アダットをデサ・ディナスの開発へと媒介するようになったともみなすことができるだろう。YPSがデサ・ディナスとのつながりを弱め、バンジャール・アダットを組織の中核とする体系だったAD&ARTを制定するのは、ここからさらに8年後、2000年の第3回業務協議会においてである。すなわち、デサ・ディナスの下請けとしての性質からの脱却は、ようやくポスト・スハルト期に可能となった。

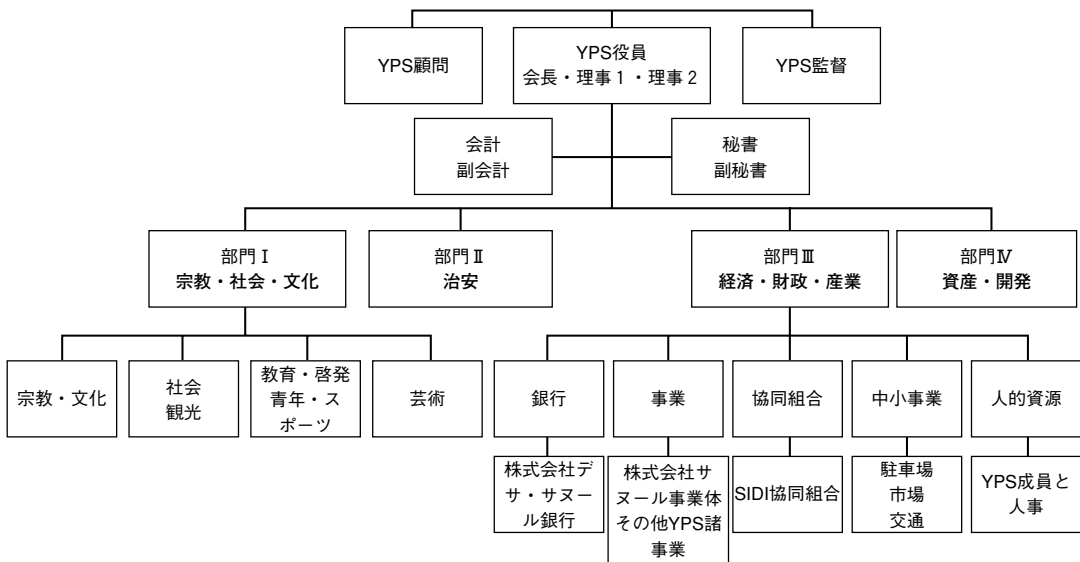
1997年の経済危機は、デサ・サヌール銀行とサヌール事業体の執行役と設立者に対して、銀行・事業体の株式会社としての地位を保つため

に、株の住民への移譲によってその両者を完全に住民の所有とするための誘因となった [YPS 2000b, 52]。1997年11月15日、インドネシア銀行の立ち会いのもとに、YPS役員、デサ・サヌール銀行役員が出席し、デンパサールのオフィスにてそのための決定がなされた [YPS 2000b, 52]。こうして、サヌール銀行と事業体は、バンジャール・アダットの監督の下に運営されることとなった^(注15)。

2. 独自の地域セキュリティ組織への着眼

そのような組織改編の後、2000年6月に第3回業務協議会が開かれ、2000年から2005年の業務内容が決定された。ここで組織は内部の機能を分化させ、いっそう自治的な活動へと向かった。図3はYPSの新たな組織構成を示しており、活動は非常に広範な分野へと広がりを見せている。

図3 2000年第3回業務協議会にて決定されたYPS組織構成



(出所) YPS (2000a) より筆者作成。

そうしたなか、地域セキュリティ部門についての具体的な規定も盛り込まれた [YPS 2000a, b]。業務協議会当日には議題・報告資料 [YPS 2000a] が配布され、後日、議事録・決定事項集 [YPS 2000b] が作成された。この両者の地域セキュリティについての項目をみると、セキュリティの担い手としては、当初、プチャランとBK3Sとされていた [YPS 2000a]。ところが決定時には、バンジャール・アダットの夜警組織 (SISKAMLING)^(注16)に変更された [YPS 2000b]。なぜなら、協議において、プチャランは地域の宗教や祭礼に関するものであり、デサ・アダット長の下にあると考えられたからであった。BK3Sについては、監督権は移譲されたものの、いまだデンパサール市政府に依っているとされた。同様に、スハルト体制下に中央集権の末端として機能したHANSIPは、影響力を弱めたとはいえ、デサ・ディナスとの関係において活動を行っていたため、YPSにとってのセキュリティの担い手とはいえなかった。YPSはバンジャール・アダットを基盤にするという点から、既存の地域のセキュリティをみれば、その役割は夜警組織が担っており、決定時にはその点が強調されるかたちとなった。しかし、夜警組織をはじめ、いずれの組織にしても、成員はそれぞれの組織がうけもつ地域からのみ集められ、機能も限定され、他の地域どうし、あるいは異なる組織どうしが相互に関連するということはなかった [YPS 2005b]。YPSは、これまでのどの地域セキュリティ組織とも異なり、セキュリティの範囲としてサヌール地域全体を面的に視野に入れ、「美しく調和のとれた環境」といった統合的な地域像をめざした。

また、協議会報告資料においては「サヌール

を訪れる観光客に、行商、物乞い、強盗、スリなどからの安全を提供する」 [YPS 2000a] と記載されていた事項が、決定 [YPS 2000b] においては、これに先立つ2000年5月10日にデンパサール市によって施行された「デンパサール市の公共の美化と秩序に関する市政令1993年第15号改正に関する市政令2000年第3号」を遂行するとされた。この政令は、1999年にインドネシア政府によって定められた地方行政法（法律1999年第22号）をうけて決定されたものであり、地域の環境整備、美化、規律、安全といったことについての規定からなる [Walikota Denpasar 2000b]。詳細には、路上駐車禁止、届け出のない場合に公共施設内での販売の禁止、手押し屋台などカートやそれに類するものを用いた路上や公共の場所での商売の禁止などが謳われている。

YPSはこの市政令を自らの活動の正統性に据えるとともに、地域の協働を基礎としてセキュリティの活動を展開した。その具体的なあらわれが、2000年11月末から1カ月間にわたって、特にインフォーマルセクターを対象に行われた一連の地域制御活動であった。活動が始められる際、YPSは、地域セキュリティの新たな担い手の組織化と地域の関心の凝集が必要であると考えた。そこで、YPSは、活動に先立ち大規模なパネルディスカッションを開き、地域の問題を、サヌール全体の問題であると同時に諸個人の身近な問題として捉えるべきであるとした [YPS 2000f]。同時に、YPSは、BK3Sだけでなく、各バンジャール・アダットの青年団、プチャラン、夜警組織に加え、HANSIP、海浜観光業就労者等からも、すべてボランティアとしてメンバーをあつめ、かれら個々のメンバーを「テ

ィムス」すなわち特別チームと称した。

3. 特別チーム「ティムス」の発足と展開

このチームの活動の詳細をみるにあたり、当時、YPSが直面していた地域の状況を改めて確認しておこう。1990年代に入り増え始めたインフォーマルセクター就労者は、1997年のアジア経済危機を境にいっそうの増加をみせていた。それとともに、観光客をめぐる争い、交通の妨害、ゴミの増加が懸念されるようになった。例えば、インフォーマルセクター就労者のなかには、ホテルやレストランの入り口に大挙して押し寄せる者、施設のなかにまで入って品物を売る者、屋台や荷車で道を塞ぐ者がいた^(注17)。そこに、人ごみに紛れたスリ、ひったくりが加わった。

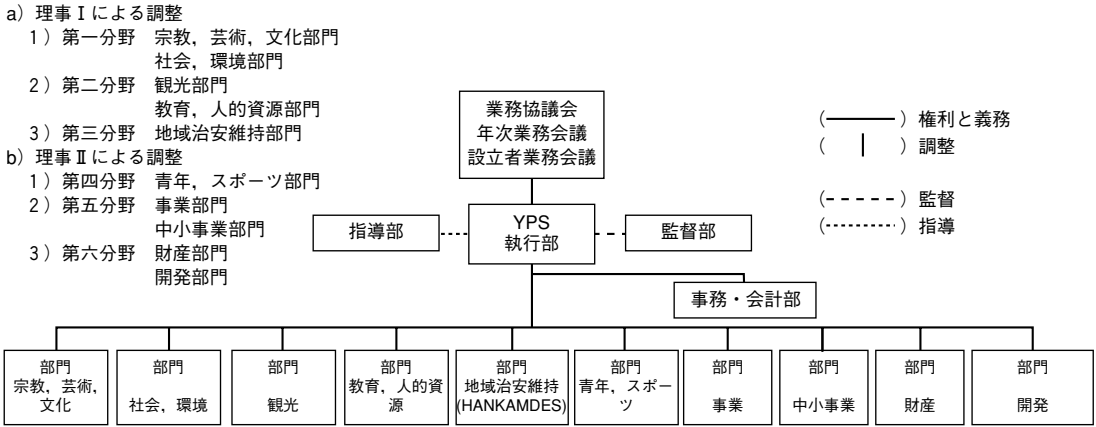
YPSは、インフォーマルセクター就労者の販売行為を統制し、取り締まるために、継続的な見回りをはじめとした一連の制御活動に着手した。そこで、先の特別チームを中心に、1カ月間、そもそもサヌール地域にはどのようなインフォーマルセクターや犯罪が存在するのか、それらは観光客にどのように接し、影響を与えているのか、デンパサール市の政令は守られているかといった点が観察、記録された。この活動を担ったボランティアな集団が、2000年12月初めの理事会をもって結成される「ティムス」(TimSus)、サヌール安全パトロール特別チーム(Tim Khusus Patroli Keamanan Sanur、略称Tim-Sus PKS)へと引き継がれ、改めて、各バンジャール・アダットから2名を目安に成員が集められた[YPS 2000c]。

その後、各インフォーマルセクターに対し、ティムスが中心となり、サヌール内での商売の規制についての手紙が街頭にて配布され、同

時に、手紙の内容、許可の必要、罰則などについての説明が行われた[YPS 2000d]。手紙には、デンパサール市政令による決定とYPSによる決定に従い、サヌール地域のあらゆる観光産業が、バリとサヌールのイメージを「元に戻す」ことに責任を負わなければならないと明記された[YPS 2000e]。12月末、ティムスは、刑法に違反するとみなされた両替商や店舗を警察へと引き渡した。また、市政令違反の対象とされるインフォーマルセクターについては、違反者に対する指導と取り締まりを担うトランティブ(Dinas Ketentraman Ketertiban dan Satuan Polisi Pamong Praja Kota Denpasar、略称 Dinas Trantib & Satpol PP)^(注18)に引渡し、その後、サヌール地域ではほとんどの観光業就労インフォーマルセクターが禁止されることとなった。この活動を端緒として、ティムスは地域におけるセキュリティの正当性と影響力を強めていった。

その後もインフォーマルセクター制御の継続により、地元観光業に開かれた環境が維持された。例えば、インフォーマルセクター就労者がひしめていた道路は観光客のために広く開けられることで、かれらは落ち着きのある地域内を妨げなく還流し、土産物店をはじめとした観光の担い手たちとのコミュニケーションの機会をいっそうもつようになった^(注19)。また、ティムスは、観光中心地域だけでなくサヌール地域の一部を通るバイパスでの不法投棄の取り締まり、事故にあった人や車の救助を行うとともに、祭礼や種々の社会活動に関連するセキュリティ活動の調整役ともなっている[YPS 2005b]。そのようにしてティムスは日常的にも存在感を増していった。こうした躍進に応じて、2005年に開催されたYPSの第4回業務協議会におけ

図4 2005年第4回業務協議会にて決定されたYPS組織構成



(出所) YPS (2005a) より筆者作成。

るセキュリティについての議論は、ティムススの話題一色となった。図4はこの時に決定された組織構成を示しており、全体として、いっそう整然としたものになっている。地域治安維持については、ティムススがBK3Sの役割をも担い、その成員をいずれチームに編入させること、プチャランやHANSIPと相互に協力し合うこと等、既存の地域セキュリティ組織との関係が整理された。あわせて、ティムススはバンジャール・アダットの代表によって構成されるボランティア組織であることが確認された [YPS 2005a, c]。

ボランティアとして参加するメンバーをつなぎとめるインフォーマルな施策のひとつが、サヌール地域のホテルや商店のガードマンへの推薦である。このことによって、ティムススは、地域のネットワークと知識を有する成員を賃労働への機会に開かせるとともに、観光産業との繋がりと情報のやり取りを円滑にしている。このことは、グローバル・ツーリズムの資本の影響や競争に晒されながらも、観光業市場にガー

ドマンとして地域住民を参加させることによって、ツーリズムの潜在的な制御力となっている。さらに、ティムススは、デサ・ディナスの役割である住民票登録や確認の助成を行っている。デサ・アダットとの関係という面でも、大小の宗教的祭礼において、チームの成員はプチャランの装束をまもって半ばプチャランとして参加するよう要請されることがある^(注20)。このように、ティムススは、役割や機能という点でも多くを担うようになっていった。

成員にしてみれば、自分たちは治安維持のためのパトロールなど警察に近い役割をしているが、法的に警察であるわけではない。デサ・ディナスによる住民票チェックの手伝いは、要請されたときのみの仕事である。プチャランとしての役割も同様であり、村落によって正式に規定されるものではない。むしろ、彼らにいわせれば、自分達は何らかの役割に偏ってしまっはならない。すなわち、地域制御の実行力であると同時に各種セキュリティ組織どうし、あるいはそれらと地域との間に立ち、調整役となら

なければならない。この点で、組織間の隔絶という地方分権の問題の解決に一定の貢献を成している。

また慣習^{アダット}にもとづくことは重要であるが、それは、プチャランの役割を重視するということではない。同様に、宗教的権威としての慣習^{アダット}を正統性の根拠としようというのでもない。それは、活動の評価として誰よりもまず、様々な構成要素の総体としてのサヌール社会にもとづき、評価されるべきという意識のあらわれである。そこでは、これまでの組織が閉じこもってきた、表1のような地域社会の分節や区別の内部に捕われるのではなく、それら全体からなるものとしてサヌール地域を捉えるべきであるという考えが基本となっている。この点では、近年の「Ajeg Bali」キャンペーンのような一側面からの大きな価値付与を、一定程度相対化することを可能としている。

ここで改めて本稿第1節の表1に立ち戻れば、BK3Sは軍・警察とともにディナスの系列から地域を掌握しようとした。HANSIPはデサ・ディナスに限られ、夜警組織はバンジャール・アダットに限られている。2000年前後から活発化しているプチャランは、デサ・アダットがもつ地方分権化時代の意義を強調し、ディナスとの機能の分有をめぐる論争を引き起こしているという点で、地域社会構成の有り様にたいして人々の注目を集めている。ティムススは、第1に、バンジャール・アダットを基礎として住民参加を促し、各セキュリティ組織の媒介となることによって多面的な構成要素を保持している。同時に、デサの次元を超え、南デンパサール郡という行政単位とは異なる、「ひとつのサヌール」という大きな地域像を生み出している。そのこ

とにより、第2に、デンパサール市の都市化の一樣態としての、ディナス面の増強、それゆえのアダット面の減退〔吉原 2006〕に対して、グラスルーツとしてのアダットの可能性を提示しているともいえよう。すなわち、ティムススの種々の役割と一連の地域制御活動において、住民参加という点では、バンジャール・アダットという近隣においてその基礎を保持している。また、活動の点では、居住地域や観光地域を含み、これまで開発の対象とされてきた村落を越える次元に役割を拡大・応用することで、デサ・ディナスの影響を一定程度相対化し、近隣部落の内部にとどまらない帰属意識の喚起を可能としているといえよう。ここには、地域の諸問題を措定し対応するうえで、草の根レベルの住民参加と、多様かつ広域な活動の機能とが共に醸成され得るような、地方分権化時代の地域セキュリティ組織の様態をみて取ることができる。

おわりに

以上、本稿は2つの着眼点と3つの対象から、地方分権化時代のバリ島における地域セキュリティ組織の展開を明らかにしてきた。着眼点としては、第1に、地域住民による、下からの比較的フォーマルな地域セキュリティ組織の形成について、第2に、バリ島の地域構成との関わりについて、スハルト体制最末期の地域掌握、その後の、伝統的側面、地域社会的側面からの民主化時代のセキュリティ組織という3つの対象の動向をおさえた。

スハルト体制最末期の地域セキュリティ組織としては、地域社会の構成とは隔たり、観光業者の呼びかけによってサヌール地域安全調整機

構（BK3S）が形成された。しかし、その組織構成は、混乱する社会状況のなかで中央集権体制を内部化し、地域を再度、体制の下に掌握しようとするものとなった。そのため、スハルト体制崩壊によって民主化が進むことにより、組織は衰退していった。代わって、地域からは二種の地域セキュリティ組織が生じた。伝統的側面では、デサ・アダットのレベルにおいてプチャランという伝統的警備隊が躍進し、「Ajeg Bali」のスローガンやバリ州政令を背景に急進化の傾向をもみせている。それは、地域住民がもつ社会不安に呼応した現象であるとはいえ、草の根の地域社会活動として評価するには慎重を要するものである。地域社会的側面からは、近隣住民組織を基盤としてティムスス、サヌール安全パトロール特別チーム（TimSus PKS）が形成された。そこでは、これまでの地域社会の構成や市政令を踏まえながら、地方分権化とグローバル・ツーリズムから派生する地域の問題、すなわちセキュリティ組織間の隔絶や空白と、統制されていないインフォーマルセクターに関わる問題を改めて確認・共有し、基盤となる枠組みや役割を応用することで地域セキュリティを一定の成功に導いている様子が明らかとなった。

また、ツーリズムに対して地域セキュリティ組織がもつ影響という観点からすれば、YPSとティムススは、地元観光業に有利な物的環境と、地域のより広域かつ統合的なイメージの醸成を可能とした。すなわち、サヌールは、静けさ、落ち着き、昔ながらのバリらしさという価値的な観光資源を手に入れた。それは、隔絶された高級リゾート地ヌサ・ドゥアや、都市的な猥雑さの魅力によっていまだ多くの観光客を集める

クタという近隣の競争的観光地に対して、サヌールが観光客を取り戻すうえで一定の効力をもつ価値でもあろう。この新たな、古き良きサヌールは、観光客の足取りをゆるやかなものとし、店先での「バリ人」とのコミュニケーションを促し、来訪者にひとときの楽しみを提供している。それだけでなく、地元土産物店の店員にとって、店先は、自分の母・子と安心して過ごすことができる場所ともなっている。さらに、滞留型のインフォーマルセクター労働の禁止をうけつつも、交通渋滞のなくなった道路を利用して、バイクによる土産物の卸売商という新たな労働形態がみられる。このように、サヌールにおける地域セキュリティの組織化は、ツーリズムにおいて目にみえる形でも大きな影響を与えている^(注21)。

以上のように、ティムススは民主化の進む地域社会に適合的な地域セキュリティ組織として生じている。もちろん、地域制御活動は、即座に地域社会構成や制度的枠組みを改変するようなものではない。しかしながら、地域独自の問題解決の試みのなかで、集会的な行動を可能とし、新たなサヌールの地域像を提示し、人々にその共有を可能とした。この点において、ティムススは、これまで所与とされてきた地域像とそれにとまなう機能の集中を変化させ、架橋し、市民的な活動のグラスルーツを地域に根付かせつつある。同様に、地域に資するセキュリティということに関して、BK3Sは集権的かつ線的な活動であったこと、プチャランは点として散発していることに比すれば、ティムススが面として活動を可能としている点で注目に値する。また、政府による集権的な統制の可能性に関してみれば、BK3Sは観光業者による新しい試み

という側面はあったにせよ、スハルト体制に捕われた集権的組織であった。プチャランは対抗文化的な活動ではあるが、その本質主義的で相互に隔絶した活動は、かつてバリ文化が創造され、操作され、国家の統治に利用されてきた一面をもつことを彷彿とさせる。それらに比べティムススにおいては、より具体的な地域や組織どうしの調整を基礎とした、地方自治のひとつの様態としての位置づけを見出すことができる。

しかしここで注意したいのは、その動きが、ポスト開発体制の錯綜と地域セキュリティ組織の不在という社会状況の中で生じたものである限り、いまだ澱の様相を呈し、上からの攪拌や濾過によって回収あるいは解消されてしまう可能性を残してもいる点である^(注22)。地方分権化と民主化、地方自治といった課題へと敷衍するのであれば、このような地域セキュリティ組織の試みが独自性を担保しつつ如何に構造化されるのか、よりマクロな動きとどのようにして符節をあわせ、接合され得るのかに注意を払う必要がある。そうした試みを経るなかで、先進国における地域セキュリティの組織化の動向、すなわち国民国家の統治能力が縮小・変容し、NPOや企業による地域セキュリティの確保、保守化・右傾化をみせる近隣住民による地域セキュリティ組織の躍進や、それらの布置を制御しようとする国家の新たな統治の戦略など、より普遍的な動向との関連のうちに地域セキュリティを捉え直すこともできるだろう。

(注1) ここで「地域セキュリティ」とは、「地域治安」と以下の点において異なる語として用いている。すなわち、暴力の占取を基礎とした「治安」の担い手やその活動・領域を意味するに留まらず、観光をはじめとした地域社会の様々な側面・分野にお

ける、住民によるコントロールや組織化を含む広義の概念である。このことにより、「治安」という言葉がもつ、中央集権体制や軍による圧政といった先見を相対化することも可能であろう。

(注2) ツーリズムに対する政治不安やテロリズムの影響という観点は、1990年代前半にはすでに存在した。1990年代の議論は、いわば国家やそれに包括されたマスとしてのツーリストに、非常事態としてのテロや政治不安が外から影響を与えるといった枠組みをもつといえる〔例えばPizam and Mansfeld 1996〕。しかしながら、2001年以降、ツーリズム自体が細分化し、テロリズムが人口に膾炙するなかで、リスクとセキュリティへの意識がより直接に旅行の動機に影響を与えたり、一地域のツーリズム・プランニングに組み込まれるような新たな状況を生んでいる。

(注3) 地域構成についてはGeertz and Geertz (1975=1989), Geertz (1980=1990), 鏡味 (2000), Warren (1993), 山下 (1999) を参照。

(注4) サンプルの地域描写はWarren (1998), Picard (1996), 問亭谷 (2000) ならびに筆者による聞き取りから。本調査は、2005年3月、8月~10月、2006年3月、8月に、ウダヤナ大学文学部日本研究センターとの共同のもとに行われた。なお、サンプルは1970年代初頭、吉田禎吾、問亭谷榮らが調査に入り、バリ島研究の深化を担ってきた地域のひとつである。

(注5) デンパサル市 (Kotamadya Denpasar) は、1992年にバドゥン県から独立し、バリ島の他の8県 (Kabupaten) と同様の規模、権限をもつ特別市となった。特別市は県とともに、第1級地方自治体 (Daerah Tingkat I) である州 (Propinsi) に次ぐ、第2級地方自治体 (Daerah Tingkat II) に分類される。

(注6) 地域内の量的データについてはBPSB (2001), BPSD (2000), Desa Sanur Kaja (2000), Desa Sanur Kauh (2000), Kelurahan Sanur (2000) を参照。

(注7) 参考までに、バリ島全体の項目にあわせて、サンプルにおいて40パーセントにあたる社会的事業を除いた場合、地域内総生産全体に占める割合として、農業は3.1パーセントと比較的低い割合であ

る一方で、工業31.6パーセント、商業・宿泊業23.8パーセント、金融・不動産17.2パーセント、「6. 輸送・電信」も10.8パーセントみられることなど、特徴がより明確になる。なお、「6. 輸送・電信」は、ベモと呼ばれる乗り合いタクシーと、電話、インターネット利用施設を含む。

(注8) サヌールのリゾート開発に対して、地域住民に資する発展をめざし設立された近隣住民組織。詳細は本稿第V節第1項を参照。

(注9) インドネシアの国家警察は、長らく軍の一部であった。1965年のインドネシア共産党によるとされるクーデタを鎮圧したスハルトは、翌年大統領として政権を誕生させた。その際、スハルトは警察を共産主義に蝕まれているとして、陸・海・空とともに国軍司令官の下におき、四軍構成をとった。そのため、2000年に至るまで、第四軍としての警察軍の権限は限られたものであった。国軍から分離し、文民警察となったのは、2000年8月の国民協議会決定第6号および同第7号による。

(注10) インドネシア陸軍の領域管理構造については、小林(2005)を参照。

(注11) 以下、スハルト体制期の地域治安維持機構として、民間防衛組織(Pertahanan Sipil, 略称HANSIP) からなる地域安全システム(Sistem Keamanan Lingkungan, 略称SISKAMLING)についてはBarker(1999)を参照。

(注12) スハルト中央集権体制下の末端に位置する地域制御組織。バリ島においてはデサ・ディナスのレベルに設置され、人員もデサ・ディナスを単位として招集された。

(注13) Daring(2003)はプチャランを市民軍(militia)と呼び、その軍人主義(militarism)的傾向が、バリ人の集産主義や、権力に屈しつつもその引き替えに多くの楽しみや社会的調和を生み出す性向に対する危機となるとしているが、こうした論は性急であると思われる。プチャランについては、インドネシア国内のポスト開発体制の社会状況、世界的な保守化・右傾化といった傾向との関連、テロリズムを含むリスク論からの分析が必要となろう。この点を含め、プチャランについてのより詳細な分析と、そうした動向を国家が再掌握しようとする、バリ島に

おける「コミュニティ・ポリシング」の展開については別稿を準備している。

(注14) 以下、YPSの略歴についてはWarren(1994, 第7章)、YPS(2000b)を参照。

(注15) 2000年の時点での収入に関しては、事業体関連として、教育研究センターの運営、サヌール地域にある朝市の運営、サヌール地域にある駐車場の運営、銀行関連として、バンジャール・アダットがもっている株(事業体と銀行)の配当、協同組合関連として、各部落の協同組合の利益の1パーセント、加えて、寄付(条件なし)からなる[YPS 2000b, 27]。

(注16) 一般に、1980年に中央集権体制の末端機構として形成された地域治安システムとは別に、地域社会における夜警の活動や組織をさして、シスカムリン(SISKAMLING)と呼ばれた。それ以前の夜警については、ジャガ・バハヤ(Jaga bahaya)、ロンダ(Ronda)など各種の呼ばれ方がある。また、ドウィアント(1999)によれば、都市暴動など非常事態において、近隣住民によって形成された自警団もまたSISKAMLINGと命名されている。

(注17) 1990年代後半のサヌールのインフォーマルセクターや犯罪については、本稿第III節ならびに第IV節の冒頭を参照。

(注18) 地方官吏警察(トランティプ)についてのインドネシア政令1998年第6号[Presiden Republik Indonesia 1998]によれば、トランティプは地方警察の一種であり、州長、県長、市長、郡長といった地方首長の下、社会調和秩序局(Bidang Ketentrangan dan Ketertiban Masyarakat)におかれる。その任務は地方政府政令と地方首長決定の確立・維持、社会の調和と秩序の保守とされ、違反者に対する指導や、刑事事件に関係する行為を発見した場合の捜査官への報告が任務となる。組織構成は、国防大臣、軍司令官、行政管理担当国務大臣の判断を通し、内務大臣によって定められ、成員が任命される。デンバサル市の社会調和秩序局長へのインタビュー(2006年3月)によれば、かつては実行行使にともなう暴力のため、住民との距離を生んでいたが、近年、NGOとの協力によって法執行の正当性を担保するなど、より民主的な組織へと改変が進んでいる。

(注19) ツーリズムにたいしてTimSus PKSのセキュリティ活動がもった意義については本稿の「おわりに」を参照。

(注20) この場合、TimSus PKSの成員がデサ・アダットによって認定されたプチャランになるということではなく、たとえ認定されていない成員であっても、宗教的祭礼時にデサ・アダットやバンジャール・アダットからの要請如何によって、プチャランの装束をまもって警備につき、プチャランの助成を務めることがあるということである。そのため、場合によっては、宗教的祭礼であってもTimSus PKSの制服での参加ということもある。近年、サヌール内の地域によっては宗教的祭礼における警護全体をTimSus PKSにまかせてしまい、プチャランが警護に参加しないという状況もみられる。ここには、都市部あるいは観光地域において、ゴトン・ロヨン（相互扶助）が金銭によって代えられることが端的に示すような、慣習面の変化があらわれているともいえよう。同じ都市部であっても周辺部や、観光地であっても山間部においてはプチャランが活性化していることとあわせて、サヌール内の慣習面の変化については、より詳細な研究を必要とする。

(注21) サヌールの土産物店をめぐる社会経済的状況の変容については、菱山（近刊）を参照。

(注22) 注13に関連していえば、コミュニティ・ポリシングは、TimSus PKSにそのパイロットケースとしての位置づけをもたせ、警察の活動の外延に取り込もうとする傾向をみせはじめている。

文献リスト

<日本語文献>

- 秋尾沙戸子 2000. 『運命の長女——スカルノの娘メガワティの半生——』新潮社.
- 岡本正明 2006. 「分権化に伴う暴力集団の政治的台頭——バンテン州におけるその歴史的背景と社会的特徴——」 杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会——マイクロロジーのアプローチ——』NTT出版 43-66.
- 鏡味治也 2000. 『政策文化の人類学——せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民——』世界思想社.

- 小林和夫 2005. 「スハルト新秩序体制末期のクラハ政府と住民組織RT/RW——東ジャカルタ市の事例——」『ヘスティアとクリオ』(1) 39-56.
- 鈴木勝 2000. 「通貨危機下のツーリズムの変容と主要国における振興政策」『大阪明浄大学紀要』開学記念特別号 57-64.
- ドウィアント, ラファエラ D. 1999. 「都市暴動と自警団」『東北都市学会研究年報』(1) 34-51.
- 菱山宏輔 近刊. 「ツーリズムと治安維持体制」倉沢愛子・吉原直樹編『変わるバリ, 変わらないバリ(仮)』勉成出版.
- 間亭谷榮 2000. 『現代インドネシアの開発と政治・社会変動』勁草書房.
- 水野広祐 2006. 「夜警と夜回り——ジャカルタにおける住民による安全確保とコミュニティ——」『アジア遊学』(90) 106-16.
- 山下晋司 1999. 『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会.
- 吉原直樹 2006. 「Urban Banjarの一存在形態——デンパサール市のある事例分析から——」『ヘスティアとクリオ』(3) 52-75.

<インドネシア語文献>

- Bali Post* 2000. “Tabanan Miliki ‘Pecalang’ Saka Bhuana Sakti [タバナン県はサカブアナサクティという「プチャラン」を所有].” June 16.
- 2001. “Tertibkan Besukih, Desa Adat Turunkan Pecalang [プサキを秩序立てる, 慣習村はプチャランを配備].” April 18.
- 2005a. “Hansip Diganti ‘Pecalang’ Kaburkan Fungsi Dinas dan Adat [民間防衛は「プチャラン」に取って代われディナスとアダットの機能は不鮮明になる].” January 21.
- 2005b. “Bendesa Pakraman Bahas Pilkada ‘Ngebug Kulkul’ Boleh, Libatkan Pecalang juga Boleh [慣習村長は地方首長選挙に「クルクルを打ち鳴らす」ことができ, プチャランの参加もまた可能であると議論].” June 13.
- 2005c. “Potas Ikan Hias, Ditangkap Pecalang Laut [観賞魚用の毒, 海のプチャランに捕獲される].” June 27.

- BPSB (Badan Pusat Statistik Propinsi Bali) [バリ州統計局] 2001. *Bali dalam Angka : Bali in Figures 2001* [統計にみるバリ：2001].
- BPSD (Badan Pusat Statistik Kota Denpasar) [デンパサール市統計局] 2000. *Kecamatan Denpasar Selatan dalam Angka 2000* [2000年統計にみる南デンパサール郡].
- Desa Sanur Kaja [サヌール・カジャ村] 2000. *Profil Desa/Kelurahan : Daftar Isian Data Dasar Profil Desa/Kelurahan* [村/町のプロファイル：村/町のプロファイル基礎データリスト].
- Desa Sanur Kauh [サヌール・カウ村] 2000. *Profil Desa /Kelurahan : Daftar Isian Data Dasar Profil Desa/Kelurahan* [村/町のプロファイル：村/町のプロファイル基礎データリスト].
- Dinas Pariwisata [観光局] 1998a. *Laporan Bahan Rapat BK3S pada tanggal 5 Mei 1998* [1998年5月5日BK3S会議資料報告書].
- 1998b. *Laporan Hasil Rapat BK3S Tanggal 5 Mei 1998 di Hotel The Grand Bali Beach* [1998年5月5日グランドバリビーチホテルにおけるBK3S会議結果報告書].
- Kelurahan Sanur [サヌール町] 2000. *Profil Desa/Kelurahan : Daftar Isian Data Dasar Profil Desa/Kelurahan* [村/町のプロファイル：村/町のプロファイル基礎データリスト].
- KOMPAS 2000. “Tanpa Kehadiran ‘Pecalang’, Bali Sudah Rusuh [プチャランがいなければバリは混乱する].” November 28.
- Naradha, ABG Satria ed. 2004. *Ajeg Bali : Sebuah Cita-cita* [アジェグ・バリ：ひとつの望み]. Denpasar : Bali Post.
- Propinsi Bali [バリ州] 2001. *Peraturan Daerah Propinsi Bali Nomor 3 Tahun 2001 Tentang Desa Pakraman* [デサ・パクラマンについてのバリ州政府令2001年第3号].
- Presiden Republik Indonesia [インドネシア共和国大統領] 1998. *Peraturan Pemerintah Republik Indonesia Nomor 6 Tahun 1998 Tentang Polisi Pamong Praja* [地方官吏警察についてのインドネシア共和国政令1998年第6号].
- Soethama, Gde Aryantha 2004. *Bali Tikam Bali* [バリがバリを刺す]. Denpasar : Arti Foundation.
- Suryawan, I Ngurah 2005. *Bali, Narasi Dalam Kekuasaan : Politik&Kekerasan di Bali* [バリ，権力のなかの語り：バリの政治と暴力]. Yogyakarta : Om-bak.
- Walikota Denpasar [デンパサール市長] 1997. *Rencana Pembiayaan Operasional Badan Koordinasi Keamanan Kawasan Sanur (BK3S)* [サヌール地域安全調整機構 (BK3S) の活動資金の計画].
- 1999. *Keputusan Walikotaamadya Kepala Daerah Tingkat II Denpasar tentang Susunan Keanggotaan Pengurus Badan Koordinasi Keamanan Kawasan Pariwisata Sanur di Wilayah Kotamadya Daerah Tingkat II Denpasar* [第二級地方自治体デンパサール市におけるサヌール観光地域安全調整機構の役員構成についての第二級地方自治体デンパサール市長決定].
- 2000a. *Keputusan Walikota Denpasar Nomor 579 Tahun 2000 Tentang Pemberian Honorarium Kepada Tenaga Satpam Badan Koordinasi Keamanan Kawasan Sanur (BK3S) Kota Denpasar Tahun 2000* [サヌール地域安全調整機構の警備員に対する謝金についてのデンパサール市長決定2000年第579号].
- 2000b. *Peraturan Daerah Kota Denpasar Nomor 3 Tahun 2000* [デンパサール市政令2000年第3号].
- Widnyani, Nyoman and I Ketut Widia 2002. *Ajeg Bali : Pecalang dan Pendidikan Budi Pekerti* [アジェグ・バリ：プチャランと品行の教育]. SIC.
- YPS(Yayasan Pembangunan Sanur) [サヌール開発財団] 1988. *Keputusan Musyawarah Kerja II Yayasan Pembangunan Sanur* [サヌール開発財団第二回業務協議会決定].
- 1999. *Surat Keputusan Yayasan Pembangunan Sanur Tentang : Bantuan Kepada Badan Koordinasi Keamanan Kawasan Sanur (BK3S)* [サヌール地域安全調整機構にたいする助成についてのサヌール開発財団決定文書].
- 2000a. *Materi Musyawarah Kerja III Yayasan Pembangunan Sanur Tahun 2000* [2000年サヌール

- 開発財団第三回業務協議会資料].
- 2000b. *Keputusan Musyawarah Kerja III Yayasan Pembangunan Sanur Nomor : 05/Muker. III / YPS/VI/2000 Tentang Pengesahan Pertanggungjawaban Ketua Umum YPS Period 1988-2000* [1988-2000年におけるサヌール開発財団 (YPS) 長の責務についてのサヌール開発財団第三回業務協議会決定05/Muker.III/YPS/VI/2000].
- 2000c. *Laporan Perihal Mohon Bantuan Tenaga, Nomor : 03/TK-YPS/ X II /2000* [警備員への助成の申請についての書簡Nomor : 03/TK-YPS/ X II /2000].
- 2000d. *Laporan Perihal Sosialisasi, Nomor : 07/TK-YPS/ X II /2000* [社会化についての書簡Nomor : 07/TK-YPS/ X II /2000].
- 2000e. *Seruan kepada Pedagang Acung dan Asongan di Kawasan Sanur, Nomor : 1.a/YPS/ X II /2000* [サヌール地域における行商と物売りへの呼びかけNomor : 1.a/YPS/ X II /2000].
- 2000f. *Proposal Diskusi Panel 2000 : Sanur Kami, Sanur Kita : Mengembalikan Citra Pariwisata Sanur* [パネルディスカッション2000の提案：私たちのサヌール、あなたのサヌール：サヌールの観光イメージを元に戻す].
- 2005a. *Materi Musyawarah Kerja IV Yayasan Pembangunan Sanur Tahun 2005* [2005年サヌール開発財団第四回業務協議会資料].
- 2005b. *Keputusan Musyawarah Kerja IV Yayasan Pembangunan Sanur Nomor : 05/Muker. IV / YPS/ IV /2005 Tentang Pengesahan Pertanggung Jawaban Pengurus Yayasan Pembangunan Sanur Periode 2000-2005* [2000-2005年におけるサヌール開発財団役員の責務についてのサヌール開発財団第四回業務協議会決定05/Muker.IV/YPS/IV/2005].
- 2005c. *Keputusan Musyawarah Kerja IV Yayasan Pembangunan Sanur Nomor : 04/Muker. IV / YPS/ IV /2005 Tentang Program Kerja Yayasan Pembangunan Sanur Periode 2005-2010* [2005-2010年におけるサヌール開発財団の業務プログラムについてのサヌール開発財団第四回業務協議会決定04/Muker.IV/YPS/IV/2005].
- <英語文献>
- Barker, Joshua 1999. "Surveillance and Territoriality in Bandung." In *Figures of Criminality in Indonesia, the Philippines, and Colonial Vietnam*. eds. Benedict Anderson, George Kahin and Stanley O'Connor, 95-127. New York : Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Cukier, Judie and Geoffrey Wall 1994. "Informal tourism employment : vendors in Bali, Indonesia." *Tourism Management* 15(6) : 464-76.
- Darling, Diana 2003. "Unity in Uniformity : tendencies toward militarism in Balinese ritual life," In *Inequality, Crisis and Social Change in Indonesia*. eds. Thomas A. Teuter, 196-202. London : RoutledgeCurzon.
- Geertz, Hildred and Clifford Geertz 1975. *Kinship in Bali*, Chicago : The University of Chicago Press (邦訳は鏡味治也・吉田禎吾訳『バリの親族体系』みすず書房 1989年).
- Geertz, Clifford 1980. *Negara : The Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. New Jersey : Princeton University Press (邦訳は小泉潤二訳『ヌガラ——19世紀バリの劇場国家——』みすず書房 1990年).
- Nordholt, Henk Schulte 2005. "Bali : an Open Fortress." In *Bali, Narasi Dalam Kuasaan : Politik&Kekerasan di Bali*. ed. I Ngurah Suryawan, xiv-xxiv. Yogyakarta : Ombak.
- Picard, Michel 1996. *BALI : Cultural Tourism and Touristic Culture*. Singapore : Archipelago Press.
- Pizam, Abraham and Yoel Mansfeld ed. 1996. *Tourism, Crime and International Security Issues*. Chichester : John Wiley & Sons.
- Vickers, Adrian 2003. "Being modern in Bali after Suharto." In *Inequality, Crisis and Social Change in Indonesia*. ed. Thomas A. Reuter, 17-29. London : RoutledgeCurzon.
- Warren, Carol 1993. *Adat and Dinas*. New York : Oxford University Press.
- (東北大学国際高等融合領域研究所助教, 2007年6月11日受付, 2007年12月12日レフェリーの審査を経て掲載決定)